



平篤胤大人日録

御自筆

特別
15
1916
1



兄内弟翁谷

彈正大弼 和臺 修理大夫 匠作

白田義就 屬山名持豐

同 政長 屬細川勝元

斯波義廉 屬持豐

元中八年北朝明徳二年閏十月五日。天皇後小松天皇受神

器於後龜山天皇。政記

五月元延元年高氏稱後伏見上皇宣旨。大舉東上。

八月高氏立光嚴親王光明稱帝。號用建武。是為光明帝。

時人語曰。親王未有一戰功。將軍賜之帝位。

元中九年北朝明德三年冬十月。義滿使六角滿高與義弘

來講和曰。駕還授器。則兩統更立如故事。許之。二十

八日。丙子。車駕發行宮。羣臣戎服扈從。閏月二日。巳

卯。御大覺寺。義滿欲用來降禮。遣使奏請帝。曰。朕

滿高義滿弟也為六角氏賴子



欲用父子礼相授。否則寧以神器斃。不肯屈下以辱祖宗也。滿高謂義滿曰。神器在彼。彼即真天子。不可

違也。政記

皇朝史甲各三朝
宗子氏憲一
子氏憲子憲盛
氏憲八朝房
子氏朝宗が姓
子入道子禪秀

心永二十三年。鎌倉管領持氏罷其執事。上杉氏憲

以上杉憲基代之。氏憲憲房之後世居山内。憲基憲

房兄憲頭之後。世居扇谷。更為執事。稱而上杉持氏

与氏憲有隙。奪其權。冬十月。上杉氏憲奉持氏弟持

仲作乱。攻持氏。持氏奔駿河。依今川氏。政記

上杉憲實山内。憲忠。憲實子。憲忠弟房頭。房長

頭定房頭の子。持房。教朝氏憲二子。清方兵庫頭。憲實弟一覽見。弟重方計郎

氏定
持朝

大内義弘子持盛來降。以其嘗諫宥之。削其封之半。外史

心永六年十月。大内左大臣。大夫。義弘。筑紫中国ノ兵ヲヒキ

テ和泉ノ堺ニ著テ上洛セズ。却テ関東へ通シ謀叛ノ企アリケル。八道

義滿義試ニ僧絶海ヲ使者トシテ此ヲナダメサトサル。トイハレ同心セズ

十一月。道義自八幡ニ出テ管領畠山基國前管領斯波義將子

細川頼元等ヲ和泉へ發向セシム。義弘城ヲ搆テ拒戰。十二月

京勢和泉ノ城ヲ攻テ火ヲ放ツ。義弘馳テ基國ガ陣ハケ入基

國ガ子滿家ト戰テ義弘討レヌ。其子新从降參ス。泉堺ノ在

家一萬間燒亡。玉代一覽

斯波右兵衛督義重道朝ノ子義將。義將ノ子義重。義重ノ子義淳。義淳子義繼

氏因斯波高経ノ子

足利高経
削髮曰道
朝

藤原姓多勸修寺ノ庶流ナリ重房宗尊親王ノ供奉ヲ鎌倉下シヨリ関東ニ位
上杉重房

下野国志曰上杉重房
憲房ハ憲安ノ孫
大徳寺晟藏三周
後ノ子ナリ後二内
管領民部大輔頭
定ノ子ニテリテ

賴重

重房ノ子賴重カ娘清子ハ尊氏真義ノ母ナリ

憲房

憲房カ弟重顯重顯カ子孫ヲハ扇谷ノ上杉ト云
大永五年四月十六日卒
皇朝史畧作康正

憲頭

憲定憲基カ祖ナリ志安元年九月死テ夜瀨
ナリ也

能憲

憲頭ノ子其姪朝房相ナリテ事ヲ執リ兩上杉ト号
外史曰上杉憲頭与義子能憲起上野心直義

皇朝史畧曰顯定
ノ子憲房ノ外史
作總

重顯云孫氏憲一室性院
氏憲ノ子
憲盛憲春侯尊氏春
ノ憲房

上杉重能

憲房義子重能ノ子顯能
氏憲子伊豫守

上杉朝宗 氏憲

上杉滿隆

上杉憲直

朝定
房義

上杉定正將大田道灌父ノ道直子ノ次男安
特朝子定正子朝良朝良ノ子朝興

朝興ノ子朝定 大文十五年四月廿日
氏康於河越橋之
川戰ニ戰死

定正ハ特朝ノ季子特朝ノ子修理大夫以真行事ナリケレハ權朝ニ四月定朝

建武二年 東宮恒良親王ヲ義貞ニ附託シ北國ヘ赴ク

曆応元年五月顯家戰破レテ泉別安部野ニ討死ス年

二十一顯家が弟顯信并新田義興八幡ニ籠ル 一覽見

同年閏七月二日義貞黒丸ノ城ヲ攻テ流矢ニアタリ死

上杉 藏人大夫憲長
學正少卿定
淡路守憲直
相模守房定
舟庫助憲將
上杉 定實
上杉 定昌
八郎藤朝
八郎藤朝
七郎憲明
同兵庫以法方
中務少輔持房
修理進高政
左近大夫朝成
朝定ノ伯父

國司ニ任セラル其次ノ子顯能伊勢國司ニ任セラル

光明院 諱ハ豊仁後伏見ノ第四ノ子ナリ

建武三年八月尊氏ノカウヒテ即位ス北村花園ヲ本院ト称シ光嚴
院ヲ新院ト称ス

重顯云孫
氏憲子

憲頭弟

憲春 刑部太輔
能憲弟

修理亮憲藤ノ子藤忠顯カ
兄
朝房友馬助

入道ニ禪秀
清
氏憲子
持房 教朝

弟
朝宗 中務少輔
入道禪助

憲政

持氏永安寺ノ乱ニ自殺

上杉憲房ノ子憲頭憲頭次男憲方
安房守憲方上杉憲春ノ弟始テ鎌倉ノ山内ニ居リ
憲方入道道合ト云
憲春ノ弟

伊豆守重能憲房男
憲定憲方子

安房守長基入道大全憲基ノ父大草街
憲基憲定ノ子
憲基子削髮号長棟

頭房修理大夫持朝息大草街
憲忠憲實ノ庶子幼名龍稱成氏与結城成朝謀伏力士於門側
初召憲忠ニ入門力士擊殺之明年長尾昌賢請京師立憲忠弟房頭為管

房頭法名可淳大居士
房頭ノ子戰信濃房義
房義頭定ノ弟義或作能

憲總憲實ノ子
外史曰頭定無子養政氏子頭實又養長憲實子憲總及其死諸家臣逐頭實立憲總為管領

憲寬憲總ノ子
憲政憲寬ノ子
憲政兵部大輔
憲勝憲政ノ子
憲藏憲政ノ子

外史曰。大文元年。木澤長政終弒其君白山。長政義宣臣也
天文十四年。上杉憲政与上杉朝定朝定與合兵攻伊勢氏。於是憲政朝定並遣使乞援於晴氏。晴氏遲疑。其臣交勸往。乃往。與兩上杉氏俱圍河越。踰歲伊勢氏康大破兩上杉氏軍。晴氏逃歸古河。外史
天文七年。相刃小田原。北条氏綱綱ノ子氏康八千兵ヲ以テ武州河越。城下ニテ山内上杉憲政扇谷上杉朝定ハ八萬ノ軍ヲ夜討ニテ大ニ勝利ヲ得。朝定ハ討レ憲政ハ上野平井へ逃去。兩上杉コレヨリ衰テ関東氏康ニ服ス。古河ノ御所晴氏ヲ氏康妹婿トシテ北条ヨリ指引ス。晴氏ハ一族頼純ヲハ喜連川ニ居シ

王代一覽

首鼠兩端

外史新田

義顯

新田義貞嫡子死于金崎城中

義興

武藏守左兵衛位受義貞後正平十三年七月起兵越後上野与足利氏將上杉能憲戰不克義宗

義治

日義助嫡子子義隆

死之

氏明

大館宗氏子備後赤田城中自盡

子細頼春戰

詔加一級助且賞從者。藤原實玄竊言曰。是何異乎

維盛敗歸而加爵哉。藤原隆資折之曰。義助之敗。非

其罪也

外史

恒良

成良

義良

皆准后藤氏所生

兒嶋範長

高德ノ子

承保元年正月大納言源隆國七十一歳卒致仕此

人宇治之閑居之來訪者昔ノ物語ヲサセテコレヲ書集ニ草

子トス宇治大納言ノ物語トテ今ニ傳レリ

一覽

堀河院又管絃部曲ニ達シ夕ニ殊ニ能笛ヲ吹タマフ特元トイ

ハ者ヲ召テ笙ヲ吹シメテ聞召サル

一覽

大將軍阿部比羅夫

齊明帝五年較手蝦夷大勝還

高市皇子

白鳳年中天武帝太子

鎮守府將軍坂上村照

天平宝字惠美押勝乱射殺其男訓

大將軍藤原利仁

延喜

鎮守府將軍大夫田宿禰

神功皇后臣

大將軍田道

仁德帝

天安二年秋八月帝崩。壽三十。敬德蘇真原山陵後。

改陵名曰田邑。世稱田邑帝。

皇朝史畧

貞觀十一年。春正月。立皇子負明親王為皇太子。

生甫三月。母中宮藤原氏中納言長良女。

政記

彙齊曰。負明親王。陽成帝也。

仁壽三年七月。中納言藤原長良薨。年五十五。良

房ノ兄。才良房男子。年二十。有テ長良ノ三男。基經ヲ養テ子

トス
一覽

臣正一位ヲ

皇后順子左

事ナク

仁明ノ后文

總壇生那 禮壽成 神名帳 現注

玉前 高皇產靈 孫玉前命也云不審

今案高皇產靈 弟生靈 皇太子也

弓前玉命 掃部連 禮也

高皇產靈 弟生靈 皇太子也
高皇產靈 弟生靈 皇太子也
高皇產靈 弟生靈 皇太子也

飯食

天安二年秋八月帝崩壽三十德葬真原山陵後改陵名曰田邑世稱田邑帝皇朝史畧

貞觀十一年祀春正月立皇子貞明親王為皇太子政記

生甫三月母中宮藤原氏中納言長良女彙齊曰貞明親王陽成帝也

仁壽三年七月中納言藤原長良薨ス歲五十五良房ノ兄ナリ良房男子ナキニヨリテ長良ノ三男基經ヲ養テ子トス一覽

八臣正一位ヲ

皇后順子左

事ナク
仁明ノ后文

上總壇生那神名帳頭注

玉前 高皇產靈吳孫玉前命也云不審

今案高皇產靈弟生玉產靈子也

玉前玉命掃部連祖也

高皇產靈弟生玉前玉命
玉前神社 高皇產靈弟生玉前玉命

飯(飯室)

飯室神社

海三座
高穴神社

額守府持國大夫田宿禰

大將軍田

天安二年秋八月帝崩

改陵名曰田邑世稱

貞觀十一年祀春王

生南三月母中宮藤原

柔齊曰貞明親王

仁壽三年七月中納

房人兄子良房男子

十一覽

神功皇后

原山陵後

馬皇太子

政記

咸立十五良

基經ヲ養子

元慶元年基經攝政外祖藤原長良之左大臣正一位ヲ
贈之 一覽

文德天皇

仁明ノ子ヲ御諱ヲ道康ト云母ハ皇后順子左

大臣藤原冬嗣ノ娘ヲ世立茶后ト申ス順子ノ事ナリ

天安十三年九月五條ノ后藤原順子崩ス仁明ノ后文

德ノ母ナリ

一覽

文天祥

宗澤

李綱

張奩傑

岳飛

陸秀夫

韓奩忠

張俊

基盛清盛
之二男為安
藝判官

率故基盛子左馬頭行盛等及撰政藤原基通大納

言平時忠而西。外史

行盛師俊成子定家亦遺其集留別焉。俊成定家後

並撰集。叔二人所作云。外史

會平負能自撰津還下馬跪曰。諸公欲何之。宗盛回

故。負能大諫其不可。外史

陽成天皇諱貞明。清和天皇先帝長子也。母贈太政大臣長良

之女。因史畧

高野天皇。注續紀。帝重祚後。不稱尊號。而曰高

野天皇。今從正史所稱。在俗前曰孝謙。後曰稱德。非

也。因史畧

玩物喪志

公方勝定院殿。藩翰譜伊達
義待公下也

孫子注解

直解 刘寅

講義

說約

開宗

集注

魏武注

銖

中二分四分一釐六毫

兩

二十四銖

鑑

二十兩

小卷源太金麻

美濃齊藤家臣

野木次左衛門

高雄山寺鐘橋廣相作之序。菅原是善作之銘。藤原

敏行^書之皆一時名世之士也。世以為三絶。^{和蒙求}

一 紙若一寸二尺寸半寸半寸事。ぬるまじり法曹主要抄

子尼のそ頃ハふところさうもあつて可成談

一 豊成の娘を中御娘と云心得うこゝ女の名り女名を

付申ハ末代事

日

一 尸とふまハ異玉ハはふ記之族とふ心ハ氏族の是職

を分てる同文性也も新長々名紫赤も有名人名

紫赤も有宿禰々名紫連々有の事あり日

一 完ハ完の誤あり肉の古字之ハ連の草字あり

一 律令日本記ハ據せハ三種の神器とふまハ古ハふり

りしあり神璽ハ劔鏡の総名日

一 神功と政子も淫乱の事傳と舎人親王と後えう偉るふ

る一 頼家實朝時政義時和田秩父もも終るを能せ

さるハ志るせるゆふ子細る事之淫毒よりさるゆ

りはかる謂る此事ハ何し

一 菅原相左近と後氏の女職定りぬ判女うされて武

家代も定りぬ將相多き申よちとせの今も惜
まらぬ物家を悲む人の歌交傳へるを徳あるもか
る時よぬぬるはくへのきをひつる

一守をうこれ豊聰の名まにく言く護良あるひて
志ふ人すくも民忠ころを考へる故一せりかえ
りめのさうひよもてるるに菅家判也子同きれと
是わらあふ不幸といふ處さ

一春ハ艱まり秋ハ飽るり夜ハあつさるる冬ハむゆと辛ハ
軽ハ甘ハ重ハ酸ハ清ハ苦ハ濁ハ

一遠江國とてあふこのあふ今切の後のまれさう
あハ流るる一 飛騨國とて法國ハたのたうなる

ふやう

昔建長寺ノ廣徳菴ニ自休藏主ト云僧アリ奥州志信ノ
人ナリ江島ヘ白日參詣シケルニ雪ノ下相兼院ノ白菊ト云見曼
モ江島ヘ參詣シケルニ自休藏主邂逅シテケリイカニモシテ忍ヨ
ルヘキ便ヲ云ケレドモ絶テ其返事ダナシ猶サマク云聞スレハ白
菊セシカタナクテ或夜マキレ出テ又江島ヘ行扇子ニ歌ヲ書テ
渡守ヲ頼ミ我ヲ尋ル人アラハ見セヨトテカクナシ 白菊トシ

ノフノサトノ人トイ思ヒ入江ノ島トコタヘヨ又 ウキコトヲ思ヒ
入江ノ島カゲニ捨ル命ハ波ノ下草ト詠テ此洲ニ身ヲ投テ
自休尋来テ此事ヲ聞カク思ヒツケル 懸崖嶮處捨生
涯十有餘霜在刹那花質紅顏碎岩石娥眉翠黛接

塵砂。衣襟只濕十行淚。扇子空留二首歌。相對無言
愁思切。暮鐘為孰促歸家。又歌二白菊ノ花ノナサケノ深
キ海ニトモニ入江ノ島ゾ嬉シキト詠テ其マ海ニ沈トナシ故ニ兒

カ淵ト名クナリ 鎌倉志卷六

鶴松丸 親鸞上人ノ童名
皇太后宮大進藤原有範之子也

一條帝寬弘元年陰陽博士安倍晴明卒 国史界

建武二年十月尊氏遂反自稱征夷大將軍。帝既

怒其弑親王於是賜節刀于新田義貞以討尊氏先

是義貞為尊氏所譖乃上書訴其罪因受東征命。

注 服屋義助。宇都宮公綱。千葉貞胤。菊池武重。大

友貞。載鹽谷高貞等武官從之。 同

永祚元年前關白賴忠薨封駿河公謚廉義 同
正曆二年大政大臣為光薨封相模公謚恒德 同

大森彦七 豫州人

豐御食炊屋姫天皇 和蒙末下
推古天皇 古事記

為今交はさいこの念我と思ふれは重代のまひをいさうつらん
の子たにさせ我やうすり孫せぞささりる源をぐうふとわとひさぬ
と六嬌母小つゝあるまればさしは花さしてちねやのものとそ
つゝゝゝゝ 保元物語

四郎左衛門賴方 月敷 一作賢 立帝掃部女賴長 一作仲 加茂六郎為宗
七帝為成 八郎為朝 九郎為仲

為朝ハ七代をうりある男のめつとにまはれざるがちんといひく
の東をもて獅子の丸をぬきしむればふり花とふよりのを
むせとちりまうもあまよとまらるる大あつめののちりの目
のうらみのうつるまはるはひふりたあすのたかしくまのりハ乃
ありまや入
付扱の玉路をみ法盗の法奉小中七帝をかくめてふく物平の
せんせうもあつりつげつふそり
いそのおのねんふちり何れ
若うげつふ

こしひと物平十七代の後流むさしの團の任人映及別當實盛
生年三十一 保元
西の門をみさ条の刺をぬきをうすねのひんまふらふのよふひん

十八年皇朝史
畧作八年則
清和天皇貞觀
八年也

一のちりひふくさむるふとをさ

水の尾北天皇の内時貞観十八年潤三月十日の夜慈天門のや
けりりる

長徳の内大臣伊周これちりあつひふ松中をこんたう家々の花北
院をうちまひりつらつてふさんけいふあつるよし法家のおまら
んかへちしうとも死さういさうせん等せん流のつにあらめらる

皇朝史畧曰時為光二女娶居鷹司第伊周通其
姉華山法皇亦聞其妹美屢往窺之伊周以為通
其姉以為通其姉以告弟隆家隆家乃率輕俠數
人夜覘法皇耻之不驟推問會伊周修太元法呪
詛東三條太后故事太元法非官不得修事發覺

太政大臣為光
謚恒徳寺稱鷹
司

帝震怒至是遣檢非違使左衛門尉平惟時肥前
前司源賴光等收之遂處竄謫物榮花語

村上
治承元年六月廿九日追号号して崇徳院と云々

大曆二年秋閏七月有狂女食人世謂女鬼界皇朝史

華山
寛和元年夏四月有大蟹上承香殿平治物語

が納之及死ハ云ハ花人々称クぬケ子

延喜天曆の二部おもさちずばやすこれありが二年にもくう
たき衆のせう大匠の家仲ち弟のせう平のやまのうら
ことふせ現たうひるがつおようこれたれが家仲もまたうら
ひをさうはせよつゝぬき大匠をせ免り
大師ちのせんぢやうの時

凡延暦寺大師さい志よのぐんこ大さうだうハ倭草の文皇
の由影に延命院四聖院ハ文法朱雀の由影に

唐の玄宗皇帝と楊妃とすじちをあらそひるにこの
めが由影あやちんげあふまくにおんがあ位ふあやちんあそ
うたれハてうこまうはあひ又うらめあひよて我々の
そくにまうはるもにあ位ふあやちんあそまうはる
まうして天子は位をあらそひあ位ふあやちんあそまうはる
あそまうはるも位をあらそひあ位ふあやちんあそまうはる
あそまうはるのうらめ三條のうらめあひよて我々の
あそまうはるのうらめあひよて我々の
信濃寺これのうらめあひよて我々の

りておぼしむる事なり

國より死すをたしめし海國にむかふての事なり
まはしし事なりとておぼしむる事なり

永曆元年三月廿日よておぼしむる事なり

はた或女のしる中教の少捕とせし事なり
この事なりとておぼしむる事なり
この事なりとておぼしむる事なり
この事なりとておぼしむる事なり

兵衛佐友におぼしむる事なり

男子二人女子一人ありては後友兵衛とわかれ
若わくは若わくは若わくは若わくは若わくは
この事なりとておぼしむる事なり
ておぼしむる事なり

佐友と若わくは若わくは若わくは若わくは若わくは
りておぼしむる事なり
あつ平家の若わくは若わくは若わくは若わくは若わくは
女夜ふげあつ平家の若わくは若わくは若わくは若わくは若わくは
この事なりとておぼしむる事なり
この事なりとておぼしむる事なり

文をうきて氣にせしふ

上皇のおね井田といふ所に二おはせしきなるにあまの男をえ
ぬふも大別れせしと云ふとされば後平家ゆきあまののひま
るけさふいふ一むしらせの國の目代よつきて上皇に
るが女よ付てとぬれるものもれいせの二帝とされ我を
ゆ一子のそ一をるれはあまの字をまろりせんとてふり
と付り

平家ゆりて去依ふが一なるまれも一うてと當家の臣人を
池二帝権臣あまの川も付てき一うはあまの川東りてき依
及坂東あてむらんれしとせぬふとて君をちり一氣しせ
ひやなくと云ふとせむらとてけいけい我まの日のぬに法

華狂を演誦せりふりまひまひとてさうとてあまのくおまてと
持仏堂に入出經二書とてとて後う地切てうせぬふ

杉原を清院之あ三年ひの卯の年誕生義隆二条
院平治元年つちのとの卯の年生れされ三人ともにも
岡の年此人あり

仁平三年四月。上不預有怪鳥。每夜鳴。度寢殿屋
上^ツ勅源頼政射之。上病乃癒。賜劔及宮女。国史
畧

蔚山城築 慶長二年 十月八日 太田花潭守一吉

大山守皇子 心神帝ノ庶子 班鳩大子 イカルカ 用明帝之子

聖德太子 用明天皇ノ子 卒年四十九歳

草壁ノ弟
高市皇子 天武帝皇子弓削舍人ト兄弟
忍壁皇子 天武帝皇子

左大臣長屋王 高市皇子之子

葛野王 大友皇子之子

弓削皇子 天武帝皇子
有間皇子 天武天皇第三子
孝德太子

舍人親王 天武帝ノ皇子
伊豫皇子 孝靈帝ノ子

新田部親王 文德第一ノ王子

惟喬親王 仁德帝ノ皇子

大叶香皇子 履中帝ノ太子

市辺押磐皇子 元恭天皇ノ履中帝ノ太子
皇記傳

御馬皇子 欽明帝ノ子
被馬子裁

宅部皇子 檜隈天皇ノ子
宣化帝

平城 桓武ノ太子ナリ

嵯峨 平城同腹ノ弟ナリ桓武帝第二皇子

淳和 桓武ノ子嵯峨ノ弟ナリ

仁明 嵯峨ノ子ナリ 太子恒ハ淳和ノ子ナリ嵯峨天皇ノ弟ト云

文德 仁明ノ子ナリ御諱ヲ道康ト云

仁明天皇承和元年正月癸丑天皇朝後太上天皇 淳和

於淳和院 纂論

天德元年 村上天 鎮守府將軍源經基卒經基負純親

王子賜姓源子滿仲又襲父官 政記

負任 安部賴時子

時人号濱藻謂奈能利曹毛也 日本記安康天皇十一年

五年春二月天皇校獵于葛城山靈鳥忽来其大如

雀尾長曳地 雄畧記

下道真備 吉備大臣也

塩燒王 道祖王ノ兄ノ道祖王ノ新田部親王ノ子ナリ

有大鳥集大宰府聽事并兵庫上 清和天皇貞觀十一年通紀

阿保親王 平城帝ノ皇子

行平 阿保親王ノ子

業平 同第五子

兼明醍醐帝第二皇子也 具平親王村上帝第七之子也羅浮子兼明之後有具平共号中務卿親王故有前後中書王之稱 以兼明号

前中書王以具平後号中書王 具平之子孫者世々有方能 村上源氏多具

古人清公是善 道真 淳茂 輔正

文章博士大江以言

同匡衡

紀齊名

大江時棟

管相丞 高視 文時

光仁帝寶八年春發遣唐使 通紀

佐伯今毛人為大使小野石根為副使時大使今毛人稱病留不行於是以前石根為假大使當此時

賜書於前，入唐使藤清河曰：汝奉使於絕域，久經年序，忠誠遠著，消息有聞，故今因聘使，使命送之，仍賜純一百匹，細布一百端，沙金一百兩，宜能刀共使歸朝。清河遂不歸。初，孝嫌帝，勅清河為大使，使唐，逮發船路，逢風，又歸唐。於是唐帝愛其方，留不歸朝。帝遣使召呼之，遂不歸朝。在于唐薨。
仁明帝承和八年，左大臣緒嗣奉勅撰日本紀四十

卷

清和帝，貞觀二年春二月，僧正大法師真濟寂。

濟姓紀氏，父彈正正也。師鍊曰：吾言真濟惑色而成魅，俗号濟曰柘本，紀僧正，濟見深殿后而感其色，死而為天狗，即是愛宕山太郎坊也矣。

惜哉，濟之短於斯乎。然而濟之才，又魁奇，貽祝於吾皇，讓名於其師，其功烈偉也乎哉。

赤染大江匡衡妻，大隅守赤染特用之女。國子監奉周之母也。

仁壽三年春，飽瘧大發天下。

寬平九年夏六月，右大臣源能有薨。

能有者，文德天皇之皇子清和帝之弟也。好學通政務，達弓馬之藝。今歲五十五，初負純親王，以源能有之女為妻，故能有之所傳之弓馬之秘奧，悉授親王。

正曆三年，紫式部卒。

本朝可及、式部之才之女。倭姫嵯峨帝皇女有皇子内親王之他。
我未見之。

應和元年、右少將藤高光遁世、隱于横川。

高光者、右大臣師輔之庶子也。

平壺 平戸也

法性寺康長捨生防戰 八幡敗軍、主上吉野還行

舟岡山 將軍義尹、大内義弘、与細川政賢戰、政賢

桂川 大永七年、三好長基入道、海雲与細川高国

尾刈小豆坂七本鎗 三好軍敗、天文十一年三月十日

織田造酒丞政房 彌三郎 下方左近貞清 佐：隼人

佐：孫助 岡田助右衛門 重善 中野又兵衛 忠利

織田孫三郎信光

良岑安在 淳和帝ノ弟

讚岐国人錦部刀良

筑後国人許勢形見

仁明天皇 嘉祥三年二月天皇不例、三月崩御、歲

四十一深草ノ陵ニ葬ル 一覽

天安十八年十二月清和太上天皇ノ尊号ヲ奉ル後ニ

水尾山ニ入タマフニヨリテ水尾帝ト申ス 曰

大政七祖大將

青木民部少輔一之

伊東丹後守長実

連水甲斐守守之
中島式部少輔氏種
野々村伊豫守雅春
直野豊後守頼包
堀田図書助勝嘉
上杉中納言景勝臣
杉原常陸介親憲
湊田大炊介長義
安田上総介

穴沢主殿介盛秀 常山紀談

秀頼公の師匠とく長刀の名師冬々陣鴨野口上杉の
戦子坂田采女とく

伊藤祐高初有數子皆早亡無継有二孫 本朝通記

祐親 姉息 祐經 祐親の子祐經九歳ノ時祐親卒又故

祐継 妹息継家

祐泰 祐親ノ子祐經祐親が已か米地ヲ奪テ怒テ祐泰ヲ奥野ニ射テ殺ス祐泰又作祐重

祐成 祐泰ノ子

時宗

藤原吉野藏下麻呂之孫也

曰 三守巨勢麻呂之孫也

曰 良繩內麻呂之孫備前守大津之子也

曰 氏宗葛野麻呂之子也

源 雅信敦實親王之子也

曰 重信同上

^源藤原師房具平親王之子也

清原夏野三原王之孫也

清和皇子 貞固貞元貞保貞平貞純

安部賴時。祖父忠賴。父忠良。賴時為六郡酋長。

伊澤 加賀 江刺 裨田 志渡 岩手

延長八年夏六月雷震清涼殿大納言藤原清貫右

中辨平希世等震死 宇多

藤原之敗。實盛獨止。奮鬪。為義仲麾下。手塚光盛所

獲。皇朝史畧 時年七十三

造詣高妙。上皇愛其方。曰西行

桑門無家。須抖擻終身。

貞元二年五月法皇崩謚後高倉院 守貞親王則後堀河帝父也

宣時即起覓之。僅得餒餘豆豉。而侑之。終夜相對。酣

飲。盡歡而止。其真率如此。

嘉元二年秋七月。後深草法皇崩。壽六十二。稱持明

院。史畧

元弘三年青

則村部下。妻鹿長宗。膂力絶人。

六波羅攻源忠顯進軍竹田足
利尊氏屯神祇官赤松則村陣東
寺三面薄攻時

皇朝史畧

文明六年二月丁卯。受惑犯輿鬼。
永正九年秋八月。北條氏茂攻相州岡崎城。拔三浦

義同走保。住吉城。

弘治三年夏五月。足利晴氏卒于関宿。

利根川圖志曰墓八宗榮寺後園中。在山人字三御所卯塔卜
イフ晴氏朝臣。永祿三年五月廿七日卒。法号八永仙院殿系山道統

北條義時

時房弟

恭時

北朝時

小山宗政

北條時

一村宗 死天王寺

回国為主。

兄
義時
子
義輝

弟
義時
北澄元

大江廣元
子親廣

以豊

Handwritten notes in cursive script, including names like 北條時房 and 北條時義.

Handwritten characters.

Handwritten characters.

Handwritten notes in cursive script.

義同走保^ス住吉城
弘治三年夏五月。足利晴氏。卒于関宿。

利根川圖志曰。墓。八宗榮寺後。園中。在。山人字。三。御所。卯塔。卜
イフ。晴氏朝臣。永祿三年。五月。廿七日。卒。又。法号。八永仙院殿。系。山道統
ノ

北條義時

時房弟

小山宗政

義時

朝時

一 村宗 死天王寺

同国為主。

兄
義時
子
義輝

大江廣元

子親廣

一 武也 武也

一 相心 一 子

一 唯 唯

弟
義時
子
義澄元

一 唯 唯

一 唯 唯

一 唯 唯

一 唯 唯

一 唯 唯

一 唯 唯

一 唯 唯

Handwritten notes on the right edge of the page, including characters like '心' and '心'.

Handwritten notes in the upper right section, including characters like '子' and '子'.

Handwritten notes in the middle right section, including characters like '心' and '心'.

Handwritten notes in the lower right section, including characters like '子' and '子'.

Handwritten notes in the lower right section, including characters like '子' and '子'.

Handwritten notes in the upper right section, including characters like '弘' and '弘'.

Handwritten notes in the lower right section, including characters like '子' and '子'.

Handwritten notes in the lower right section, including characters like '子' and '子'.

Handwritten notes in the lower right section, including characters like '子' and '子'.

Handwritten notes in the lower right section, including characters like '子' and '子'.

義植

政元幽義植於上原秀家宅

六角定頼

兄 義晴

富山政長

自殺正學寺子

尚順自越前走周防大内義興

子 義輝

細川政賢高国尚春

澄之植長年無嗣浦上村宗死天王寺

奈良元吉内藤貞正伊丹元扶通謀義植奉細川高国為主
興兵諸国

義澄

富山義豊

細川政元子政長爭權政育義植通義豊

弟 義維

義英 義豊子

細川澄之

政元子

同澄元

三好澄元ノ臣

同精元

奉義維自向波至界

大永元年夏六月，高国迎義澄子義晴于播磨，立之
時年十一。

義維

三好元長

畠山義宣

本願寺光教

木澤長政

細川晴元

三好政長

瑞泉君

長春

天文十三年夏四月河越戰

皇朝史畧
相州兵亂記

天文十五年四月廿

日十八年冬十月，景虎屯信濃，及武田晴信戰于海

野。常山紀略是說天文二十三年八月十八日弘治二年三月廿五日

日二十一年春三月，長尾景虎及武田晴信戰于特

田。

遠藤喜右衛門直継

遣上野清信於刑部賜書晴信使予信長平

前波播磨守信越前守

安土臣大昭傳助建部紹智崇信法華

高坂昌信

信孝信之出城赴知田宇津美信雄遣人殺之於路

秀吉築城於山城内野号曰聚樂

漢城開城平壤号為三都

明主震怒罷鎬以天津巡撫萬世德代之

若有緩急須以豐臣勝俊為援

秀信嬖臣入江左近

上杉憲政嬖臣菅野大膳上原兵庫介

俊鶴生名雛

成貞者。和氣氏。章親子也。夾立以醫術專其業。勉審

藥劑。能辨榮衛。決死生嫌疑於診脉。仕于白河堀河

之內朝。治療皆有効。著于立。故人咸稱曰俊之扁鵲

本朝蒙求成貞倭扁

常山倭兒の母三村上野介の妻ハ此ニ生るるガリガ

とりの女也。成て完於立。死するもや。三村が一族

今を限ふ一甲せんと。紅のうまを甲の上まて。薙刀お

つとりて出らる。局の女どもわら。むれば。まとく死。

立急び。命を令せ。一人をも付せ。まとく死。

まとく死。やあるとや。切て走り。世に。世に。誰の。こしんとて

立ち上る長柄の鎧を穿り突て出る 元就の先陣浦を敵と戦

尼子伊豫守晴久尼子刑部大賀澄行は兵一万を率へて彼中
経山の城を攻させしむ此時八中將加賀守ケ子大炊助元行ウ吉
日地なり中畧えりか母物の具此上羽打を忌刀を横と女
房二十人斗ねをへえり本丸ある時母出丸を巡りえり
出丸を巡る母本丸を守りて士卒の怠を戒む

天文二十一年 実休 三好三後守 持隆 細川讚 弼一 具後室成巴ウ

妾と一悪逆を恣まは

此時三十五六歳計此女房の緋おどりの物此具着眉尖刀を握
げ諏訪莊右衛門が妻あなりと名けり七八人を死伏々自害し一室
仁科五郎信盛高遠の跡継

織田信孝秀吉と弓箭をこころ時信孝の乳けんと人質小秀吉
の母をよも一宣せしむ礫水一と誅せしむかの乳の人此子小幸田
彦右衛門と一信孝此大物なり是より前秀吉信孝此長谷小
せかしくいふふあふ下世当はいつて信孝あ育まられとも幸田
は背り信幸田が母誅せしむふ及て子の彦右衛門の書を送りて我
今やしく成ことゆめく歎くべうい親必子に先づ川ゆひな
り唯心をせむも君は背地余くせそと云ふハ一は此八聞人
感し一は里天文十一年四月十八日秀吉の先陣信孝此地を責入る時
幸田兄弟いさきよく討死しとありと 常山紀談

容顔美し武者緋おどりの物具中二段黒革をとおと一は此
鎧を握来り富田が矢面を立ちさぐり支へ戦ひしり 秀吉の兵中川流左衛門
とふ者を討死しとあり

かくて富田門に入る特かの武共を死ねば殿は恙なく口をせりふり討死
とぞく形は女ありとも男子ありともいひて出ひしよりふを信
言の北北方なり 信高の北北方、浮田安心の女 信高怒りて且收ひ打連く城入り
今日の有振きぐひまはせりといふあり

佐治總殿、信高は、は、後長曾系教と向く大坂は、龍崎一、居、堪、後
也、田、は、お、と

昌幸ハ引返しく沼田の城ゆく信之ヲ妻ト対面せんと云らる信之
の北北方ゆもつに既に父子仇となりて引分せしむるハ父とて
れとていとも城に入奉りてまんふさん事思ひもあはれとて本
丸の門を固めさせ自り物具取出し女房を皆刀を倒し置り所
も下も馬あぶり一厨の土間を居るけとて下ふせしれり

拾遺云、信高の山に佐久間不干、前、頂、慶、荒、本、根、津、守、村、重、龜、とて大坂の門を建如しより、政、倭、
天正六年五月三日の合戦中、御坐、朝、茶、臼、山、の、西、子、見、ハ、龍、波、の、貝、殼、塚、の、合、戦、中、不干、手、力、佐、久、間、
大坂の門を固めさせ自り物具取出し女房を皆刀を倒し置り所も下も馬あぶり一厨の土間を居るけとて下ふせしれり
天王寺勝曼此鎗貝殼塚の鎗備前八演の鎗をこい言

傳えられ平松の鎗ハをさしたるなりと世の人賞しり 菅山、延、終
弘治年中川中島合戦小信玄の兵輪形月半大夫とふ共鉄炮
をもて福しひしを後信馬を乗せ一刃を切伏かけ通られり
後甲斐の兵どももせざる小輪形月ハ物具かけ切し持する
一兩筒ハ二の見通の上より切放しりいある刀やかくハ切し
といひあつる小則かの兼光此刀なりと云 竹俣兼光の刀
菅 政 二尺三寸有ざる刀を抜く忽ち切伏きり其刀今小菅の家
了持傳ふ後前吉次が作るり大徳寺春菴和為其刀ハ敵死秦
と名を付しり

松本別源志二 藩翰譜小笠原傳

可児方花ヶ下人小久石米門と云ふ別の子ありや其其祿の本分
を興へ竹内久石米門と云ふ

五月廿日天王寺口の御先手加賀利等命せしれ一うは忠直
を急らして特命多伊豆守然らば昨日先づけて加賀の軍兵
を踏越えおもふに軍せんかゝる事ハ吉田修理よく決りある
者ありゆとて云ふ

秀吉河原林越後を興へらして一総持ハ三條吉廣う作る

秀吉やまよ越さし一付丹羽長重の小松北城よ立寄しる小長重の士
成田助九市といふ者も秀吉の不義憎むし餘り臣も付手仰付
らばよ輒く刺殺し一といひらばとも長重聞入らしてさや止し
株瀬川よ三成り兵備よあて進むよ有馬の士稲次右近

鳥毛の半月北さし物さく角一りもを横山監物といふ三成り士
て引組より稲次より後者助け来り横山を引伏しよ如く歌を言て稲
次が曹せり引仰く稲次ふり放さんとする時後者又助け来りて

其後稲次よ六十石祿増興へらして八十五也嶋原の城攻め討死

せーとや

赤尾伊豆ハ美作り子なるを浅井長政の信ら長政滅後京極宮
次子仕へ大津の就母いさ山田大炊足輕頭ハ井口左京大將紀後
あまの門次儀番山田三右衛門横山久内田中茂幸流茨川イサ口也
固めらる

鉦子五帝を流今日栗色の志不革も金の筋つけに羽折を忌
かの白熊北雪の如くあるを曹の上よ一かけ十文字北鎗也

横之尾関を右衛門と共々乱れ入る敵五六人突伏く曹の鋸を
せ傾け一足も引まゝいと呼ばり

長良次為黒田伊豫守手よ心を通し一はさバカなく和平しく城を出
多賀孫左衛門大坂より来る御前より召く京口の旗をよくとるり
し敵攻入しとす召より仲有し口惜く存せしむひて泪
を流しおりさて丹伊本多より向ひ下部の中木履雪のつまひ
るぬくも御出馬よあれあんとぬき城より次あるはこそ敵日
敵をば支へいとひらきハ越えさうり理なりとぞさへられし

りり

三刀谷監物孝和ハ其先祖兼久の乱に軍功をく出雲の三刀谷
の郷を物よりなるより氏とて大敵あかほせしむるも

持ててハ備よ孝和の智勇さくまかりなるなり

宇土まは南條元珠こもり居り此元珠ハ伯耆羽衣石の城主
南條左衛門元次より二男あり兄の元重より弟らぬ大割の者なる
が毛利元就と申さる事度より及ぶ敵あつとすて只一騎
をよみ上帯あめてかけし半里が絶し軍兵とも追つて速し
國境より押あ軍兵を追散しする勇士なるが

尾藤左衛門尉宣秀長の馬に書せ取て義弘が鋒武田四郎が
長篠の掛り口も似たり関白もかるるせのふづくはと絶てぬれ
バ既よ川へ打入るるを叩て進み渡り 耳川の合戦

永井善左衛門浪人あり 徳川 上列深谷に閑居し有る時人
のらるる瀬戸の茶入を秘藏せし小女を落して打破りぬ下女

警起くは鏡臺より五倍子を入る壺を元山一見ゆかきり
小奉らんと不用山も立ぬものなるほど是を請取をぬ後小掘
遠御見ても打く是は唐物の肩衝なりと称美し後子公奉
まゝとらん

辻太市外 朝倉藤十郎 中山助六 戸田半平

鎮田市右衛門 太田甚四郎 汝孫久左衛門

御子神典膳太刀持ち戸田辻等の七人を上田の七本鎧とま中なり

後子依田を太刀付し一二の論有り辻は依田朱塗の頬当せし

とふ御子神は依田朱塗の曹恙頬當はなるとふ牧野右馬

先後者を馬二郎少く上田小遣し極くわいて山本後善太文

あひ其時の事を問ふ山本が云此論有る事なり誰人もせよ

頬当をわけまるとふ人初太刀なり依田は頬当わけざり此せし

此場の鎧下るれは血を深くを朱ぬりの頬当とんくもさ

あつと云しをゆて取り牧野の鎧よりけ御子神一の太刀

子さハまりたり 依田は兵部と云

大坂夏陣は真田信仍と伊達家と軍する時伊達家の孫有

鉄炮をうち立され玉の飛こと霰の降がぬく信仍が軍兵ど

も折しとく鎧を敵の方へさし向らる居るふ西村孫之進と

ふ者うさむしむ味方此屍二ツを重祿と盾として居るふ玉ツ

来る二ツの屍をうち通し孫之進は肩を傷れききともうは子

なり鎧を握るる左のこぶし乃大指こそをわけて氣味悪く覚え

跡は指四本ゆく大指をわきり込くとへきり 中畧 此時孫之進

伊達家の秋部甚平とふ者を討取りしども其姓名をたしん
落城後孫に進いまいつきの衆も仕へてにたまたも
むさめりしが相知る者の方へおれりもの得る時客来
り主人西村が事をかきりて大坂の事おぼしめし
ふかの客ハ伊達家の士海道林左衛門とふ者あり甚平ハ刑部
信仍討死ししを首をば越前忠直の士西尾仁左衛門取り
一揆の長四郎が首を細川家の足輕陣佐右衛門取り
大崎玄蕃長行三京城主福嶋正則

菴原ハ助右十文字の鎗をよこし進んで木村を目ふりけり立向へり
木村菴原を二鎗まで突きりて菴原鎗のふりて取り殊敷を
もよおし念佛をとりて野猪にあれりめく木村が鎗の下

に走り入り突伏し安藤長三郎かけ来り其首給そんやふ
菴原はて大坂落城日けり一敵の大將の首と事易くありあ
りていふハ安藤木村が首をえ

増田兵大夫ハ長盛の子なり夏の甲子御赦をえり城中より秀
頼より賜りし赤地の錦に羽織をえ若江の軍敗軍の中より福ふ
えより浮田但馬の役者とい組とていへり其首を得しれども名を
衣北忠儀平三郎といふよりいへり其首を得しれども名を
えり其刀を捕りしるが考吉より長盛の御つりもの花兵衛と
いふことあり

横田すみおとふ一つ思ふあはれ直孝が甲兵過半を負死
人も多しといふ心をやりけともけ日の先陣はかり換らば直孝畏り

かりんとも強て仰出されしと申せしが 東照公我も左思ひつる事

大王寺口の陣

五月六日

よして加賀利常本多忠純を先陣に命ぜり申せり 赤頼の物頭

忠純の首を森侍に取つるなり 忠純の軍は必死を期して我と曰く枕を死んとおしお忠の起請文

をわけしとされし加藤忠左衛門大庄作を取つ藤井次左衛門四将

七名揃ひ起請文をわけしとるを少将助の由士の甲におん小命

をむ人やあるとてあざ笑ひと打立り

廣瀬をバカ馬青木が祖の稲葉伊織討取り廣瀬は美濃ケ子孕

備前

石の主水ケ子あて共甲斐の武田北家の士なり

廣田 國書水野 鉄炮は玉をこみこられしと思ひて打しり

消しとる鉄炮をなげ捨る鎗を取集瀬又右取つと敵を

合せ突伏らしむる後成をり申す奥平を討取し後鉄炮を
見し火ぶきとさしとあり

明石掃部頭全登り士深原孫太布を捕て以名ケ行方を問ふ

ふとふとふとふと拷問し及びはとも更しをたあまり

さひさひ責らせし涙を流しられはり方をふとて問ふ

ふと問ふは深原いひはる関東の支御不此言はよくおつとあり

を感し申すの事あり

奥平の長兄奥平源八傳ハ父の誓言同性真人を討し相興

せる士多し源八幼くし奥平の家を去りし一味の面も

皆去りし源八が成長を待居たる其中一人の士妻は稲葉

丹後守正通の家養士け女と有るが父のもと預け

イ藤

五年一の頃て誓言討べき事及び妻のもと小行くと存る旨の
あまが離別するありいづ方ゆても嫁しむひく親の苦勞小年
ゆふされといひけしき彼妻は年久友隔かく思ひ
し小俄ふかく仰かひ定めて故有べし然るがごとくいとまの
かりき親ふ向ひしきいふいふま詞もかひはといひぬれ
今ハ茂みかこくく誂は志くの子細よく誓言をうけし
組一せぬ其時討死する又ハ公の答ふよく殺さる
二の間に有べし一海牙の年若き人の傍りぬれを彼妻も
ひひの隙より髪をいひしとせと折言言し別れしと
あり其後誓言討めせし彼士も散り小衝き助太刀く彼妻
のもと小行くと對面しむももとひひの間より髪の長くぬり

とせしひい其まゝありとぞ

福島左衛門大夫正則の内伊藤伊右衛門武田勝頼を討奉りし
なり

輝屏ハ流書有將軍良基四代の孫左衛門尉政経二男村景五郎
忠通ヲ奉りて其後長尾と稱す

永来丹後守 弘中参河守 陶全善功臣

え就まらる秋平評定せし進りて教大平甲を宮島ゆい
思ひつらひせん是吾とあへて進のゆいれんと覚ゆるなり又草
津女日市小たれよせるハ岩國の弘中参河守られ小心をあら
すれら裏切させし陶をうち破るべし
二連木の合戦小中多平八郎牧宗次郎鎧を合らる小幡を

少招くもきりー蜂谷子とく澗ハ合しる小いふとふ者
るー城まし一巫すて他人鎗をさるんよ我ハ切合せよと
いひすて刀を掲げて敵の中へ飛込下二人ふさ伏しふふ升
山垣とふ若鉄炮をかまへるふ小走里から山垣かくれる
さ手たせあてうちこふ小胸をありー小起りうりてそを
ハ引せりしほども蜂谷つひに死しるるとぞ

実体はバ根来を京打とぞなり
北条丹後一尺四方北白練子思き蟻を捨り書て持おま
るを諛信んて

姉川の戦小坂并右近子久花十六もて討死三升角右串の
生瀬平右忠の二人とも久花の首を得りてふ

上杉より有坂傳中を七尾もお記するが長^{オモウ}拾^ケ尼^ミふ十希
を大将とておしよせ戦ふよ長^龍連敗おしや危うしを
谷大学討死ー長やーわく引せりてなり

細川忠興

宗信

飯河 豊前

妻ハ米田助右衛門是政ウ女アリ宗信と睦ク

対面セシム事三年及ベリ忠興細川是政ウ後室の尼雲仙院

といふをよびて豊前肥後罪有長考と誅せしども汝ウ女と孫の

女も飛告なり密告に命を助けたり後室の尼ゆき肥後

ウ妻常小中より脱走し夫をすてゝわづらひし事と

得て存中まされど仰の忝きをバ告中りけしバ誠告に仰ハ忝

らと今ハのさハ夫をすてて遁中しん事人道ありけ女子ハ

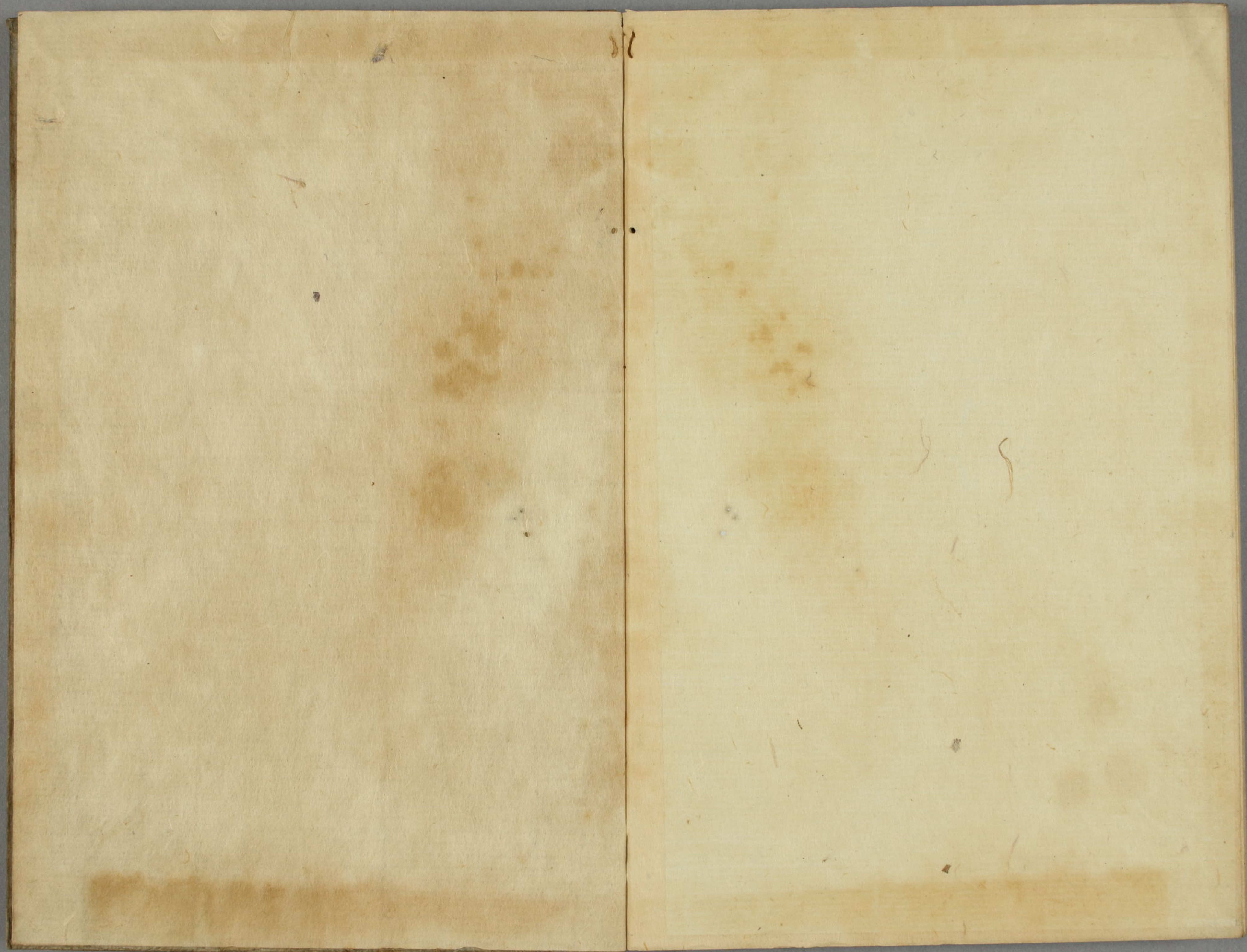
西を乞中まし共中に養育しけり事とて使中つげり尼の

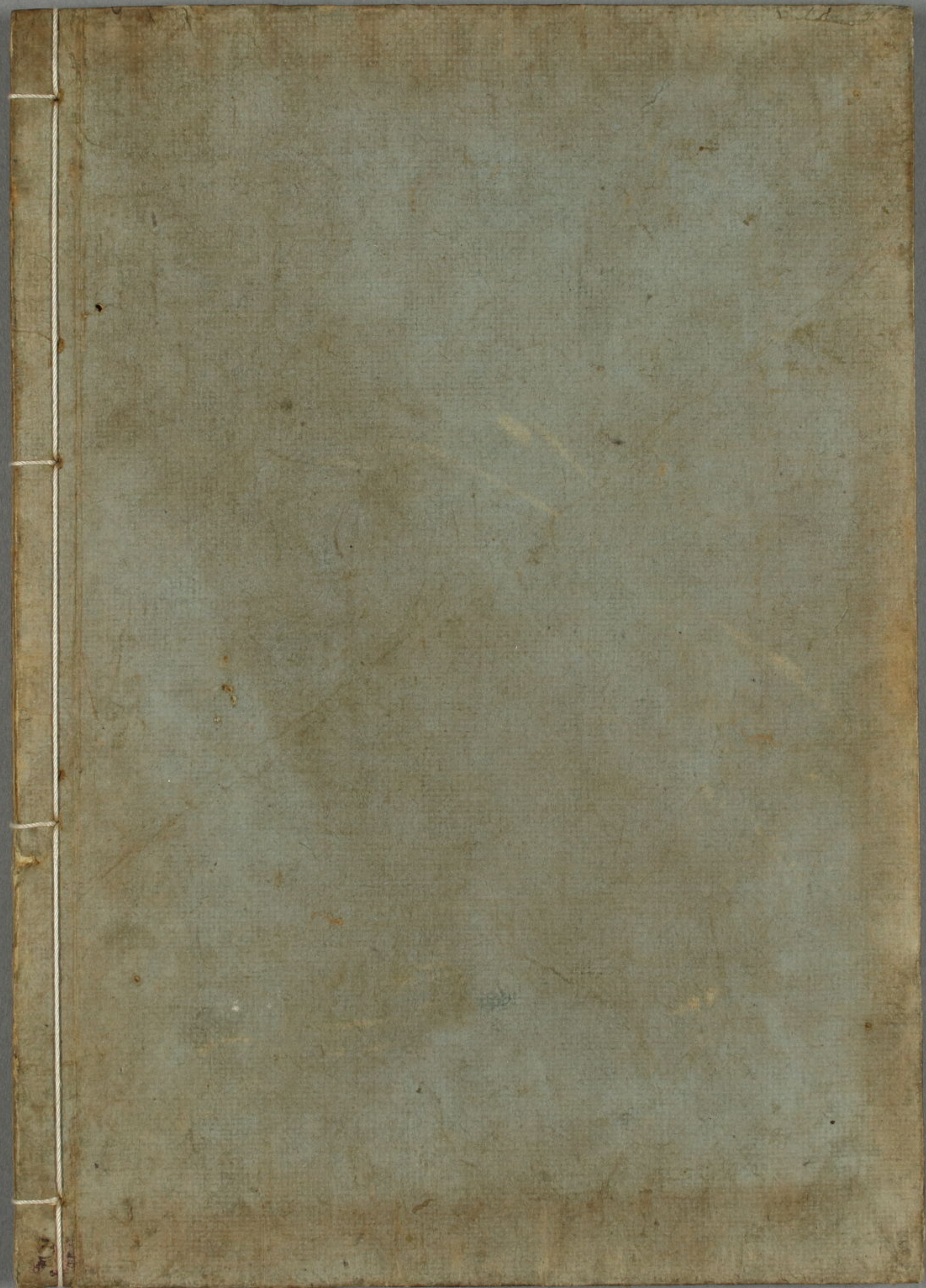
もと送りし宗信是をゆて大小悔中に我過を謝し終中小共中自

害中しりたり

都築物左衛門の秀綱が妻の跡を指せ来りて所供の人中小く

をいあふい後小衣服を賜りて賞美なり





平田篤胤大人手澤本

